



高橋美和

岩手県JA江刺 総務部 組合員くらしの活動課 課長

たかはし・みわ／1999年、JA江刺に入組。複数の支所(店)の信用渉外業務を11年、経済部・経済生活業務を7年経験し、2018年からは本店の総務部 組合員くらしの活動課に。係長として女性部支部事務局などを担当。2021年より現職、総務部として総代会、運営委員会にも携わる。

くらしの活動や女性部をはじめとする組織活動の活性化に力を入れているJA江刺では今年、「農業・農家組合のコミュニティについての組合員アンケート」を実施しました。このアンケートは、地域組織基盤である農家組合が持続していくための一歩として組合員くらしの活動課が中心と

なっていました。組合員との関係づくり、組織活動の強化について、高橋美和課長にお話を聞きました。

■「ありがとう」と感謝されることが一番の励み

——支店での勤務を長きにわたり経験された高橋課長。仕事を通して“協同の力”などJAの強みを感じられたできごとはございますか。

入組から現在までたくさんの部署を経験させていただきました。業務に慣れたころに異動があり、苦労したこともありましたが、その時々の上司や、仲間に励まされて前向きに仕事ができるようになりました。渉外時代は、組合員の自宅に呼ばれて自家製野菜の漬物・手作りお菓子などをいただきながらお話を聞く機会も多くありました。そうした時間から得る情報を業務に繋げることができました。

配属先が変わっても様々なイベントで再びお会いできる点も J A 職員の醍醐味。年金友の会や女性部事務局業務を通じて、出身地以外の組合員や地域の皆さんと出会えた経験は財産です。数年経っても「久しぶり！元気だった？お茶飲みにおいで！」とお声がけいただけること、皆さんに「ありがとう」と感謝されることが一番の励みになっています。



農家組合の持続可能な経営基盤の確立と強化に向けて話し合いを重ねている

——組合員くらしの活動課では、女性部をはじめとする組織活動に加え「くらしの活動」の強化に力を入れているとのことですが、取り組み方針や運営上の工夫、今後の課題などがございましたら教えてください。

男女・年齢問わず集う企画を計画し、組織基盤強化に繋がることを期待しています。昨年度はSDGsミニ講座、今年度は豆腐作り体験会、親子で農業体験を実施しました。

また、近年、農業従事者の高齢化や後継者不足等で農家組合の運営が危ぶまれていることから、この4月に「農業・農家組合のコミュニティについての組合員アンケート」を実施しました。

——農業・農家組合のコミュニティについてのアンケートについて詳しくお聞かせください。アンケート実施までにはどのような経過がありましたか。

アンケート実施以前、将来にわたり持続可能な経営基盤の確立・強化を図ることを目的に昨年10月に「J A 江刺みらい推進委員会」を設立。常勤役員をはじめ、室・部長らの委員会メンバーで協議・検討を行ったところ、農家組合の衰退や運営への懸念が課題として挙がり、組合員の声を聴くためのアンケートをとることに決まりました。



広報誌「stem」2023年6月号 (P6-7)「農業・農家組合コミュニティ(地域社会)についてのアンケート調査結果」は [コチラ](#) から

アンケート調査結果は広報誌「stem」(2023年6月号)へ掲載。今後は「J A 江刺みらい推進委員会」での協議・検討、農家組合協議会や地区運営委員会などでの報告を通して、持続可能な経営基盤の確立と強化を図っていきます。今はやっとスタートラインに立った状態。まだまだゴールは見えませんが、このアンケート結果を通して話し合いが深まっていくように方策を考えているところ

です。

■ 自らの手で実現することが女性参画への一歩

——女性部活動として、「生き生き塾」の特徴的な取り組みを教えてください。また、塾開講の目的や成果、工夫されていること、課題なども教えてください。

大人気の女性部カルチャースクール「生き生き塾」の始まりは2016年。自分磨きや仲間との交流を楽しみ、元気に輝く女性を目指すことを目的に開講しています。趣味や教養の多種多様な内容でカリキュラムを企画し、令和4年度は、寄せ植え講習会、ビー玉とワイヤーを使って作るマールアート教室、江刺金札米と大豆を使ったみそ作り講習など、全6回開催しました。

普段は支部(地区)ごとの活動がメインですが、「生き生き塾」は本部役員(支部長9名で構成)を中心に企画し、管内から毎年定員40名を超える申し込みを受けています。毎月の支部長会議で運営内容の協議を行い、司会進行も女性部が行っています。自分たちがやりたいことを自分たちの手で実現することの喜びが、女性参画の一歩になることを期待しています。



自分磨きや仲間づくりを通じて元気に輝くことを目的に開講している

——女性部役員が主体的に運営しているケースは珍しいように感じますが、本部役員との関わりの中で工夫されていることはありますか。

生き生き塾では開講当初から、女性部役員を中心に運営しています。運営では、本部役員の意見を尊重すること、JA側の意見は提案レベルに抑え女性部の皆さんの「やりたい!」を引き出すことを心掛けています。

企画考案は毎月の支部長会議で実施。コミュニケーションを大事にしながら情報交流の場になるように取り組んでいます。苦労がある中でも任期2年の間に支部長同士の関係が深まり、地区を越えた絆が生まれています。

——女性部をはじめ、仲間づくりや組織運営に関して、心がけていることがありましたら教えてください。

「私も参加してみたい!」と感じてもらえるよう、活動の様子を広報誌等に掲載して情報発信しています。参加案内は過去参加者へのDMやスマホから気軽に申し込みができる「QRコード付募集チラシ」の配布により周知しています。口コミも拡散力が高く効果があります。親子イベントについては、教育委員会を通じて小学校児童一人ひとりに開催チラシを配布しています。

コロナ禍においては、「女性部活動できることからはじめよう」を合言葉に、ペットボトルキャップ回収運動を実施しました。各地区センターのご協力、広報誌・職場内報での定期周知により2021年は252kg(ポリオワクチン約63人分)、2022年は543kg(ポリオワクチン約136人分)のキャップが集まりました。



ペットボトルキャップ回収運動は2023年も継続して実施中

■当 苦労もあるけれど「楽しんでやろうね！」

——教育文化活動を進めるプランナーを務められている中で、課題としていることと、望んでいることを教えてください。

当該部署にならないと『家の光』を身近に感じる事が難しいのが現状だと思います。業務上だけでなく、自分の生活にも役立つことを職員一人ひとりに気づいてほしいです。私個人としては、さまざまな場面で職員へ『家の光』の活用方法について紹介していますが、職員全体へのPRについてはまだまだ課題がありますのでそういった機会を設けられれば良いですね。

——最後に、高橋課長が仕事でいちばん大切にしていること、心がけていること、今後の展望などを教えてください。

大切にしていることは、組合員や職員一人ひとりの出会いと、感謝する心です。イベントでは、「自分がやってみたいこと」「行ってみたい場所」「食べたい物」等を取り入れ、自分自身も楽しいと思える企画を参加者と一緒に楽しんで行うことを心がけています。

組合員くらしの活動課は広報担当を含め、私の他に6名おり、上司から「夢や目標を持とう！」と言われていています。複数の企画や事務局をやるうえで苦労もあるけれど、若い職員にも人付き合いや仕事を通して得るものを感じてほしいです。そのためにも、「楽しんでやろうね！」との声かけやヒントの提案を行い、課内一丸となって計画を成し遂げます！

(取材／7月7日)